

四天王寺本「秦川勝像」をめぐって

伊藤 純

一 はじめに

四天王寺には「聖徳太子摂政像〔伝秦川勝像〕」と称される画像が蔵されている。解説には以下のようにある。⁽¹⁾

聖徳太子摂政像〔伝秦川勝像〕 一幅

紙本着色 安永七年（一七七八） 九三・八×三五・八

銘文から「秦川勝像」として伝来してきたが、近年の研究により、奈良・薬師寺蔵の「聖徳太子摂政像」の忠実な模本であることが指摘された。讀及び銘文から、奈良の井上平五郎家の所蔵であった薬師寺本を、四天王寺中之院が幕府の故実家伊勢貞丈を同行させて模写

したものであるとみられている。薬師寺本は法隆寺傳來「唐本御影」を受け継ぐ中世に遡る唯一の遺品であるが、笏を執り佩刀して左向きに立つ太子の図様は、中世以降ほとんど流布しなかったようで、本図はこの図様が近世には「秦川勝像」とし認識されていたことを示しており、太子図像流布の様相を探る上で興味深い資料である。

四天王寺本「聖徳太子摂政像〔伝秦川勝像〕」は現・薬師寺本「聖徳太子像」と称されている画像の模本である。四天王寺本と、現・薬師寺本とを詳細に比較検討した石川知彦氏は、現・薬師寺本の制作年代（一三世紀後半とされる）を踏まえ、唐本御影との比較検討から、現・

此画賛 繪地彩色上ニ色紙形ヨトル大ニ此紙ノ如シ端方ハ地ニ緑青ヲスリテ其上ニ処々下繪アリ緑青ノ色変シ大字皆剥落シテ見エ中ニ阿弥陀ノ三字カスカニ見ユ字形臭ク方ヨリ小ニ真ノ色帛形ハ白キ色胡粉地ナ筆者世尊寺行成卿ト云画ノ筆者ハ傳來ナシ絹ノ幅此紙ノ横ノ通リナリ右、秦川勝像賛奈良人井上平五郎家藏安永七年六月四天王寺へ奉納ス

此間緑青地

四天王寺中之院奉寫

眞文云墨カキノ節所々絶タリ太刀ノクサリ前ノ方ナシ同サヤ中絶平緒ノ如キ物上ノハニナシ皆スレハゲテ朽損虫クヒ等ナルニ又云冠ノ上ニ花形ノ如ク三葉アルハ巾子ヲ括リタル緒ノ輪ニナリタルニテヤアラニ



四天王寺本 秦川勝像

薬師寺本は当初には聖徳太子像として制作されたもので、作者を慶政上人（一一八九―一二六八）、あるいは彼の弟子筋を推定している。その後、現・薬師寺本が伝来する過程で、近世後期に「秦川勝像」と称されるようになったのだろうと述べている。³² 加えて「薬師寺本制作に際して、太子の髭など何故に『唐本御影』を正確に模写しなかったのかは、現時点では不明と言わざるをえない」との疑問も述べている。

本稿では石川氏とは異なる視点で、四天王寺本「聖徳太子摂政像（伝秦川勝像）」から判明する事実、さらには推測される周辺の状況などについても述べてみたい。

二 四天王寺本が伝える事実

四天王寺本には模本の作成過程についての書き込みがある。書き込みは以下の通りである。なお、片仮名を平仮名にし、句読点を付した。

（右上）

此画賛 絹地彩色上に色紙形をとる。大さ此紙の如し。

端の方は地に緑青をぬりて、其上に処々下絵あり。緑青の色変し、文字皆剥落して見えず。中に阿弥陀の三字かすかに見ゆ。字形奥の方より小し。奥の色帟形は白き色、胡粉地なり。筆者、世尊寺行成卿と云。画の筆者は伝来なし。絹の幅、此紙の横の通りなり。

右は秦川勝像、賛奈良人井上平五郎家藏。

安永七年六月 四天王寺へ奉納す。

四天王寺中之院摸写

此間緑青地

描かれている人物は秦川勝とある。これが最も重要な事実である。原画（現・薬師寺本）を所持していたのは奈良の井上平五郎。平五郎が所持していた画像を、一七七八年（安永七）六月に四天王寺の塔頭・中之院の者が模写し、四天王寺に納めた。原画の讚は書家・世尊寺流の祖・藤原行成（九七二―一〇二七）によるものだが、絵の筆者は不明であるとのこと。

（右下）

貞丈云、墨かきの筋、所々絶たり。太刀のくさり、前の方なし。同さや中絶。平緒の如き物、上のはしなし。皆すれはげて朽損、虫くひ等なるべし。又云、冠の上に花形の如く三葉あるは巾子を括りたる緒の輪になりたるにてやあらん。

この絵に描かれている装束・武具について、故実家・伊勢貞丈（一七一七～一七八四）の所見が記されている。

これらの書き込みから、描かれている人物は秦川（河）勝であり、井上平五郎が所持していた原画（現・薬師寺本）を一七七八年に模写したという事実を踏まえ、周辺の事情を探ってみたい。

三 秦河勝について

描かれている人物は秦河勝である。まずは河勝についての『日本書紀』の記述を見たい。

六〇三年（推古一一）一一月一日

皇太子、諸大夫に謂りて曰はく、「我、尊き仏像を有

てり。誰か是の像を得て恭拝まむ」とのたまふ。時に秦造河勝、進みて曰さく、「臣、拝みまつらむ」とまをし、便ち仏像を受く。因りて蜂岡寺を造る。

六一〇年（推古一八）一〇月九日

客等、朝廷を拝む。是に、秦造河勝・土師連菟に命せて、新羅の導者として、間人連塩蓋・阿閉臣大籠を以ちて任那の導者とす。

六四四年（皇極三）七月

都鄙の人、常世の虫を取り清座に置きて、歌ひ舞ひ福を求めて珍財を棄捨つ。都て益す所無く、損り費ゆること極めて甚し。に、葛野の秦造河勝、民の惑はざるを悪みて、大生部多を打つ。

以上の三つの記事が秦河勝について『日本書紀』が記すところである。これを見る限りでは、当時の世にあって河勝はとりたてて大活躍した重要な人物としては描かれていないことが分かる。

四 その後の秦河勝

『日本書紀』では平凡な記述にすぎなかった秦河勝であつたが、その後、河勝のイメージは大きく変化していく。

『聖德太子伝暦』（九一七年）では

五八七年（用明二）

乃ち軍の 允 まつりしする

秦造川勝に命じて白膠木を取りて、四

天王の像を尅み作る。：（中略）：川勝、（物部守屋）

大連の頭を斬る。

仏教導入をめぐつて、蘇我馬子・聖德太子の導入派と、物部守屋を中心とするの反対派との戦の記述である。聖德太子に従つて河勝が重要な働きをし、戦勝祈願のため河勝が四天王像を刻んだという。さらに敵の物部守屋の首を取つたのは河勝である。この『聖德太子伝暦』の記事に対応する『日本書紀』崇峻即位前紀では

是の時に、厩戸皇子、束髮ひざごはな於額にして（古俗、年少児

の、年十五六の間は、束髮於額にし、十七八の間は、分けて角子あけまきにす。今も亦然り）軍の後に随へり。自ら付度はかりて曰はく、「将はた、敗らるること無からむや。願に非ずは成し難けむ」とのたまふ。乃ち白膠木ぬりを断り取りて、疾く四天王の像に作り、頂髮たきふさに置きて誓を發てて言のたまはく、：（中略）：爰ここに迹見首赤梲いろい有りて、（物部守屋）大連を枝の下に射墮いおとして、大連并せて其の子等を誅ころす。是に由りて、大連の軍、忽然たちまちに自づからに敗れぬ。

とある。『日本書紀』の記述では四天王像を制作したのは聖德太子自身であり、守屋を討つたのは迹見首赤梲である。どこにも河勝の名前は登場しない。このことから『日本書紀』から『聖德太子伝暦』までの二〇〇年近くの間、聖德太子をめぐる物語が作られていく過程で、秦河勝が重要な人物に変化していくのである。

さらに聖德太子と河勝の関係がより密になるのは『上宮聖德太子伝補闕記』（一一二二年）である。五八七年（丁未Ⅱ用明二）の記述では、物部軍におされ聖德太子側が

不利になりつつあった時に「(太子軍の)士卒氣衰。軍政秦川勝、軍を率い太子を護り奉る」さらに「川勝白樫木を採り四天王像を刻造す」とある。矢に当たり木から落ちた物部守屋に対し、川勝は「進んで(守屋)大連の頭を斬る」と。ここまではほぼ『聖德太子伝暦』と同じ内容であるが、戦で大活躍した川勝に、後に制定されることになる冠位十二階のうち「大仁」を授けたとある。

『聖德太子伝暦』から『上宮聖德太子伝補闕記』までの二〇〇年程の間で、聖德太子と河勝の関係はより一層親密になって語られるのである。『日本書紀』の記述ではとりたてて重要な人物として描かれていなかった河勝が、時を経るに従い、聖德太子の行動と分かちがたく結びつき、あたかも太子と一体のように語られていくのである。

五 秦河勝と申楽(猿楽)

一方、秦河勝は申楽の始祖として語られることは周知のことである。外来の芸能が日本に導入されたことを記す『日本書紀』では、

六十二年(推古二〇) 是歳

百濟人味摩之^{みましまいき}帰化て曰く「呉^{くれ}に学びて、伎楽の舞を得たり」といふ。則ち桜井に安置^はらしめて、少年を集へて、伎楽の舞を習はしむ。

とある。百済からの味摩之なる人物が渡来し、呉の芸能・伎楽をわが国に伝えたと記す。

その後一二三三年(天福元)に^{しよのちかすね}伯近真が古来の楽曲・楽器の由来や奏法を集成した『教訓抄』四では⁽³⁾

古記に曰く、聖德太子我朝生来し給て後、百済国より舞師渡る(味摩子)、伎楽を写し留て、大和国橘寺一具、山城国太秦寺一具、摂津国天王寺一具、寄せ置く所なり。…(中略)…又雅楽習写し給ては、公家一具寄進せらる。(今の南北二京、舞人楽人)天王寺一具寄せ置かれる。彼寺の仏事供養料。今秦氏舞人楽人天王寺住む。寄進後三箇絶えおわる。

とある。聖徳太子の時代に百済から舞師「味摩子」が来朝したという内容は『日本書紀』と同様である。加えて舞にかかわるモノ一具を橘寺、太秦寺、(四)天王寺に寄せ置いたとある。申楽の始祖として河勝の名前は登場しないが、秦河勝像の写しを蔵する(四)天王寺の名前が登場する。また、秦氏の楽人が(四)天王寺に住んだと記す。

申楽の始祖として「秦河勝」の名前が最初に登場するのは一四〇〇年に成立した世阿弥の『風姿花伝』(一四〇〇年)であらう。⁽⁴⁾

(序) それ、申楽延年の事わざ、その源を尋ぬるに、あるいは仏在所より起り、あるいは神代より伝はるといへども、時移り、代へだたりぬれば、その風を学ぶ力、及びがたし。近頃万人のもてあそぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦の河勝に仰せて、かつは天下安全のため、かつは諸人快樂のため、六十六番の遊宴をなして、申楽と号せしよりこのかた、代々の人、風月の景を借つて、この遊びの中だちとせり。その後、

かの河勝の遠孫、この芸を相継ぎて、春日・日吉の神職たり。よつて、和州・江州の輩、両社の神事に従ふ事、今に盛んなり。

『風姿花伝』に初めて申楽の始祖として秦河勝が登場する。近頃(世阿弥の時代)行われている申楽は聖徳太子の命によって秦河勝が始めたと述べている。さらに、「第四 神儀に云はく」の段では⁽⁵⁾

上宮太子、守屋の逆臣を平らげ給ひし時も、かの河勝が神通方便の手にかかりて守屋は失せぬと、云々

とある。仏教導入をめぐる戦において、河勝は神通方便(神仏の不可思議な力)を用いて守屋を倒したとある。『聖徳太子伝暦』『上宮聖徳太子伝補闕記』が記す聖徳太子と河勝の密接な関係を『風姿花伝』は踏まえているのである。

一四六五年(寛正六)頃に成立したとされる金春禅竹『明宿集』では⁽⁶⁾

秦河勝の事。

成長に従ひ、才智世にすぐれ、賢臣・忠臣の誉れを受く。その後、上宮大子の御身を離れず随順したてまつる。守屋の逆臣を滅ぼし給ひし時、太子の神通の御矢に当て、櫓より落つるとて、法華の文を唱て、「如我昔諸願、今者已満足」と。河勝次の文を唱て、「化一切衆生、皆令入仏道」。その頃わ、この経、漢土よりいまだ渡らざりし時なり。いづれも権者の方便、利生あらたなり。かの河勝に猿楽の業を仰下されて、橘の内裏紫宸殿にて翁を舞ひ初む。上に記せることし：（中略）：河勝の御子三人、一人にわ武を伝え、一人にわ伶人を伝え、一人にわ猿楽を伝え。武芸を伝え給ふ子孫、今の太皇太后の長谷川党これなり。伶人を伝え給ふ子孫、河内天王寺伶人根本也。これわ、太子、唐の舞楽を仰てなさしめ給ふ。仏法最初の四天王寺に於きて、百廿調の舞を舞ひ初めしなり。猿楽の子孫、当座円満井金春大夫也。

聖徳太子が「河勝に猿楽の業を仰下され」と、河勝が申楽の始祖であると述べ、続けて河勝の子供、一人は武芸、一人は伶人となり、もう一人には申（猿）楽を伝えたとある。河勝の子の伶人は四天王寺の舞師の祖であり、申楽を伝えた子は円満井座（金春座）の祖とある。

六 原画（現・薬師寺本）を所持していた井上平五郎

井上平五郎は奈良の人で、茶湯者として著名な松屋家と親密な関係であった。井上家と松屋家の関係については永島福太郎氏の詳しい解説がある。^⑦

松屋の記録を熱心に写したり、蒐集したものは井上平五郎である。水谷川氏本および慶大本の識語にも井上平五郎よりの借覧本である旨が記されている。：（中略）：松屋（土門氏）には名物集は宝永元年（一七〇四）の奈良大火で焼失したが、すでにさる人が他門に懇望して写し置いたので、それを再写して松屋の備本にして置いた。たまたま火災以前の松屋の原本を井上正以が許されて写していた。その正以が写したのは、その

前半だけであつたが、子孫の井上平五郎の代に至つて、松屋から今度は転写本からではあるがその後半を写して与えられたということがわかる。…（中略）…元文

三年（一七三八）には松屋元亮が松屋を中心とした茶道の大項目主義百科辞典ともいふべき茶湯秘抄五巻を編述している。その資料にはばう大な記録が必要だつたろうから、松屋の蔵書はかなりそのころもあつたといえよう。ここで推測して見れば、そのあと宝暦・明和（一七五一〜七二）ごろに、井上氏が松屋茶記録の一部を譲与されているのではあるまいかということである。このことは松屋がこのころから、急速調に衰退して行つたことも考えあわせていうことができる。

井上家と松屋家の親密な関係が語られている。さらに江戸時代中頃には松屋家の財政が傾き、蔵品が井上家に譲与されたのではなからうかと述べる。井上家と松屋家の密接な関係が伺える。しかし、茶人である井上家に河勝像が伝来してゐたとは思えない。奈良の豪商とはいへ、塗師を家業としてゐた松屋家に河勝像が伝来してゐ

たとも考えにくい。申楽の始祖として語られる河勝なので、松屋家と能楽（申楽）者との関わりを見ることによって、手掛かりが得られるかもしれない。

七 松屋家と能楽（申楽）

松屋家と能楽（申楽）者と関係を知るには、松屋久政（一五二一〜九八）・久好（？〜一六三三）・久重（一五六七〜一六五二）三代にわたる『松屋会記』が手掛かりになる。⁸⁾

能楽関係者の家を訪問して茶会をしている場合、能楽関係者と松屋家の者が同道して友人宅を訪ねて茶会を行っている場合がある。以下、時系列にそつて見ていきたい。なお「」内の人物の解説は、茶道古典全集での註記である。

「久政茶会記」一五三三〜九六年 六三年間

一五六一年

7/25生女宅へ行く。金春権守〔奈良金春座の鼓打〕

同道。7/25四聖坊宅へ行く。金春権守同道。

一五八六年

2／24 賀茂大野村の金春七郎安照〔のち八郎。金春太夫〕宅へ行く。12／4 金春七郎安照宅へ行く。

一五八八年

12／21 金春八郎〔安照〕宅へ行く。

一五九五年

4／19 金春八郎宅へ行く。

久政、金春座太夫の許を訪ねること四回。金春座の者と茶会席に同道すること二回。茶会記による限り、久政の能楽者との交遊は金春座以外には確認できない。

「久好茶会記」一五八六～一六二六年 四〇年間

一五八八年

2／26 金春又二郎〔金春座太鼓打か〕宅へ行く。

一五九〇年

5／20 東阿弥陀院宅へ行く。金春又次郎同道。

一五九四年

4／17 金春八郎宅へ行く。

一六〇九年

12／12 大坂天満織田有楽様宅へ行く。金春八郎同道。

「御茶の時は、金カウ七太夫〔金剛座の太夫〕御呼被成候而、勝手より出て、御茶の時は三人になる」

12／12 大坂天満金屋道也宅へ行く。金春八朗・〔金剛〕七太夫同道。

一六二二年

11／2 住吉屋道務宅へ行く。大藏源〔右脱〕衛門〔金春座の太鼓打〕同道。12／6 大藏弥右衛門〔狂言師〕宅へ行く。

一六二五年

2／3 大倉源右衛門宅へ行く。

久好、金春座の関係者の許を訪ねること五回。金春座の者と茶会席に同道すること三回。このうち一回は金剛座の太夫も同道している。茶席に金剛座の太夫が呼ばれること一回。金剛座の関係者も登場するが、久好も金春座との関係が深いことが確認できる。

「久重茶会記」一六〇四～五〇年 四六年間

一六〇四年

4／22 金春八郎〔名は安照。金春太夫〕宅へ行く。

一六一八年

1／19 服部甚助殿宅へ行く。大倉弥右衛門〔金春方狂言師。もと弥太郎〕金春三助〔未詳〕同道。

2／25 大藏弥右衛門殿宅へ行く。

一六二五年

12／12 大藏長右衛門〔金春座小鼓打〕宅へ行く。12／18 高安太郎左衛門〔金剛座脇師〕宅へ行く。12／19 郡山奥平金弥殿宅へ行く。金春七郎〔金春太夫〕同道。

一六二六年

12／6 中坊左近様宅へ行く。高安太郎左衛門、大藏源右衛門、金春三助同道。12／25 大藏源右衛門宅へ行く。大藏弥右衛門同道。

一六二七年

2／14 大藏庄左衛門宅へ行く。12／18 中左近様宅へ行く。高安彦太郎〔のち太郎左衛門。金剛座脇師〕、同三右衛門〔彦太郎の弟。金剛座笛師〕同道。

一六二八年

11／9 観世左吉〔観世座小鼓師〕宅へ行く。

一六二九年

2／9 大藏長右衛門〔金春座小鼓打〕宅へ行く。閏2／7 千貫屋良以宅へ行く。金春七郎同道。

一六三〇年

1／14 金春七郎〔宗竹〕宅へ行く。12／17 大藏六藏宅へ行く。金春七郎、同新介同道。

一六三一年

1／8 松平下総守様宅へ行く。大藏源右衛門同道。2／23 金春七郎宅へ行く。

一六三八年

1／4 松平下総守様宅へ行く。大藏弥右衛門同道。一六三八年

2／4 江戸屋与左衛門宅へ行く。大〔倉〕長右衛門同道。

一六三八年

3／5 大藏源右衛門宅へ行く。

一六四一年

2／19 大藏長右衛門〔金春座の小鼓打〕宅へ行く。2／23 郡山日高右衛門兵衛殿宅へ行く。大〔藏〕源右衛

門同道。2／23郡山長坂茶利九郎殿宅へ行く。大藏源右衛門同道。

一六四二年

2／7大藏源右衛門宅へ行く。「金剛左京〔右京頼勝か〕ゆや〔熊野〕の曲舞あり」

一六四六年

3／7中坊長兵衛殿宅へ行く。「書院にてはやし三番有之、又金剛右京三井寺、大藏源右衛門〔助三。金春座の太鼓打〕一ちようつづみ」12／22小堀遠江守殿宅へ行く。大倉源右衛門とび入。

一六四七年

1／14大藏長右衛門〔金春座小鼓打〕宅へ行く。1／28石井宗有宅へ行く。「書院にてうたい〔謡〕四五番あり、ねき小三郎、大倉六藏、弥平次弟子ども」

2／3平野権平殿宅へ行く。金剛左〔右〕京同道。「舞台にて、能七番有候、太夫は金剛左〔右〕京、主殿介小性、脇は高安太郎左衛門〔金剛座脇師〕・平野権平殿、小つつみ大倉長右衛門・小性菟、大つつみ伊右衛門・小性衆、笛太こ小性衆、狂言平権平殿」

2／4高安太郎左衛門宅へ行く。「書院にて、色々の菓子ども、うたい六七番有候、…〔中略〕…金〔金剛〕右京・大〔大藏〕源右衛門〔金春座太鼓打〕・大〔大藏〕長右衛門・奥坊・高〔高安〕三右衛門・花藏院、座衆六七人出る」2／22大藏源右衛門宅へ行く。「うたい十番程有之、内一番は、はやし也」

一六四八年

2／8大倉源右衛門宅へ行く。2／19大倉長右衛門宅へ行く。「うたいあり、はやし三番あり」2／22中坊宅へ行く。金春八郎〔金春座の太夫〕など同道。

「大源右衛門〔金春座太鼓打〕一挺鼓二而、はん〔班〕女のゆふへのあらしより、大〔大藏〕庄左衛門〔大藏太夫。金春家の別家〕うたい、大長右衛門〔金春座の小鼓打〕一挺鼓にて、三井寺、山寺の春の夕より大庄左衛門うたい」

久重が金春座関係者の許に出向くこと一一回、金剛座関係者宅へは二回、観世座関係者宅へは一回。同姓同名の人物も登場し正確には数えにくいだが、茶席への同道者も金春座関係者が圧倒的に多いことは明らかである。

このように『松屋会記』で久政・久好・久重三代の能楽（申楽）関係者との交遊関係を見ると、松屋家は金春座の人との交遊関係が極めて深いことが分かる。

八 四天王寺本・秦川勝像周辺の事実と推論

現・薬師寺本が最初に紹介されたのは『薬師寺全』とのこと。^⑨「聖徳太子像」として

本図は法隆寺献納宝物（旧御物）として著名な阿佐太子筆の伝説のある聖徳太子二王子像（いわゆる「唐本御影」）のうちの太子像に似ており、おそらくこれを本にして描かれたものと思われる。…（中略）…最も注目すべきは、御物本太子像に描かれている口髭や顎鬚が本図にはまったく描かれていないことである。

このように本図には御物にみられない幾つかの点が認められるが、さりとて本図を彼とは別系統の一遺品と考えるべき有力な根拠はなく、それらの相違点は彼を粉本としながらも、新しい時代趣向を盛り込んだという範囲内で理解し得るものと考えられる。

とある。^⑩唐本御影との相違点を指摘しながらも、現・薬師寺本は今日まで聖徳太子を描いたものとされてきた。しかし、四天王寺本（伝秦川勝像）に書き込まれた内容から、現・薬師寺本は聖徳太子ではなく秦河勝像として制作されたことは明白である。

一方、唐本御影の聖徳太子像と、現・薬師寺本は酷似していることも事実である。『聖徳太子伝暦』（九一七年）、『上宮聖徳太子伝補闕記』（一一二二年）で見てきたように、聖徳太子と秦河勝のイメージが分かちがたく結びついていったという事実も見てきたとおりである。

以下、これまで明らかにしてきた事実を下敷きにして、私の推論を述べることにする。

秦河勝への見方が時とともに変化していくのと並行するかのように、申楽も成長し展開していく。自らの芸能の始祖の姿・秦河勝の姿を創作するにあたって、聖徳太子とあたかも一体の人物として語られるようになった河勝であったため、唐本御影の聖徳太子像を下敷き・手本



秦川勝像

歳未詳

秦川勝 『集古十種』



同像

大和國法隆寺藏
百濟阿佐太子所画

聖徳太子 『集古十種』

にして河勝像（現・薬師寺本）を作り上げたのではなからうか。河勝像（現・薬師寺本）が、絵画研究者の見解である一三世紀後半の作とするならば、『教訓抄』（一二三三年）に妓楽に関する一具下された寺院の一つに（四）天王寺の名称が初めて登場して以降、数十年間のどこかで河勝像が創作されたのであろう。その後『風姿花伝』（二四〇〇年）で申楽の始祖として秦河勝の名が明記されたのであろう。河勝像を創作したのは大和申楽四座のうちで最も歴史が古いとされる円満井座（金春座）によってではなからうか。

『松屋名物集』¹⁾に見られるとおり、松屋家は広く茶湯に関連する各所の名品を調査し記録している。このような流れの中で、金春座関係者との交遊が深かった松屋家だからこそ、河勝像の存在を知ることとなったのではなからうか。秦河勝像が一時松屋家の所有となっていたのか、松屋家からの情報によって後に井上家が河勝像を所持することとなったのかは分からないが、一七七八年の時点では河勝像は井上平五郎の許にあったことは動かない事実である。

その後、『集古十種』（一八〇〇年）の時点では「蔵未詳」と註記されており、行方不明となっていたことも事実である。

どのような経緯を経たのかは全く分からないが、いつの時に、秦河勝像は薬師寺が所有するところとなり、今日に至っている。しかし、現・薬師寺本は伝来についての記録はないようで、その図様が唐本御影の聖德太子像と酷似していることから、少しの相違点に気づいてはいたものの、唐本御影によって創作された聖德太子像として今日まで語られてきたのである。

九 終わりに

二〇二〇年二月四日、四天王寺宝物館で開催されていた「令和二年新春名宝展 聖德太子の姿」で「聖德太子摂政像(伝秦川勝像)」に私は初めて対面した。それまで、唐本御影をはじめとする聖德太子画像に少なからず興味を持ってきた私である。四天王寺本には、現・薬師寺本は秦河勝であると記されていたのである。先人と同様に、現・薬師寺本は唐本御影をもとに創作された聖德太子像

であると、何ら疑問を抱かずにいた私にとって、驚きを超えて大きな衝撃であった。

衝撃を跳ね返すべく、手近な史料を少しずつ捲ってみた結果の報告がこの小文である。

事実と推論部分がちや混ぜにならぬように書き分けたつもりではあるが、推論が過ぎていれば、それは私の勉強不足によるものである。諸賢の御寛恕、御叱正を願う次第である。

註

- (1) 『平成二十七年新春名宝展 太子のまなざし―聖德太子信仰の多様性―』（四天王寺勸学部 二〇一四年）。
- (2) 石川知彦「薬師寺の聖德太子像と四天王寺の『秦川勝像』」（『密教図像』二五号 二〇〇六年）。
- (3) 日本思想大系23『古代中世芸術論』（岩波書店 一九七三年）八九頁。
- (4) 新編日本古典文学全集88『連歌論集 能楽論集 俳諧集』（小学館 二〇〇一年）二〇九頁。
- (5) 註(4)二五〇頁。「第四 神儀篇」は、他の本文とは異なり、後に付載されたとされる（風姿花伝 解題）。
- (6) 日本思想大系24『世阿弥 禅竹』（岩波書店

一九七四年）四〇四～〇五頁。

(7) 松屋会記「解題」『茶道古典全集』九卷（淡交社
一九五七年）四六五～六六頁。

(8) 『茶道古典全集』九卷（淡交社 一九五七年）。

(9) 前掲註（2）石川論文。

(10) 奈良六大寺大観 第六卷『薬師寺 全』（岩波書店
一九七〇年）一〇二頁。

(11) 『茶道古典全集』一二卷（淡交社 一九六二年）。

【付記】四天王寺本〔秦川勝像〕の実見・写真撮影にあたっては、四天王寺勸学部主任学芸員・一本崇之氏の助力を得た。ここに明記し、感謝を表する次第である。